

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00646

研究課題名(和文) 言語バリエーションとしての方言文法の多様性を生む社会的・語用論的な要請の解明

研究課題名(英文) Elucidation of the social and pragmatic demands that give rise to the diversity of dialectal grammar as a form of language variation

研究代表者

又吉 里美 (Matayoshi, Satomi)

岡山大学・教育学域・准教授

研究者番号：60513364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の期間中の2020年に発生したcovid19の影響により、特に2020～2022年度にかけて移動制限等もあり、十分な現地調査が行えず、全体的に研究の見直しをおこなった。本研究成果は以下のとおりである。琉球諸語における指示詞の研究課題を整理できた。北琉球方言における指示詞の機能として、喜界島、奄美大島、うるま市津堅島の指示詞についての記述、整理をおこなった。北琉球方言の指示詞の記述を通して、琉球諸語の指示詞研究の課題を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は以下のとおりである。日本諸方言・琉球諸語の研究において、指示詞についての研究報告は立ち後れている状況にある。そうした状況にあって、本研究で整理、記述した言語データは、日本語の指示詞のバリエーションの多様性を示す資料的価値を持つ。たとえば、佐仁方言では指示詞の形式において必ずしも均一性を持っておらず、体系内で不均衡であることが指摘される。また、うるま市津堅の指示詞は2系列であり、共通語とは異なる指示詞のシステムがある。これら北琉球諸方言が示す実態により、琉球諸語の指示詞の課題をより明らかにすることができたが、それは日本語研究の発展に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：Due to the covid19 outbreak in 2020 during the period of this research project, we were unable to conduct sufficient on-site surveys, especially from FY2020 to FY2022 due to travel restrictions, etc., and the overall research was revised. The results of this research are as follows. (1) We were able to organize the research issues regarding directives in Ryukyuan languages. (2) As the function of directives in the Northern Ryukyuan dialects, the directives of Kikai Island, Amami Oshima, and Tsuken Island in Uruma City were described and organized. (3) Through the description of directives in the Northern Ryukyu dialects, we were able to clarify the issues in the research on directives in Ryukyuan languages.

研究分野：日本語学

キーワード：方言 琉球諸語 関西方言 指示詞 文法

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

言語はある社会において使用される。それは、社会のあり方が何らかの形で言語に影響を及ぼすことに他ならない。これまでの方言研究や社会言語学では、多くの記述を通じて各地域の方言の実態や、言語接触等による言語の伝播が語られてきた。一方、その社会のあり方が当該の言語形式、特に文法形式にどのような影響を及ぼすかについてはそれほど積極的に語られてこなかったように思われる。社会のあり方が変容すれば、言語のあり方も変容することが予測されることは、昨今盛んに議論されている歴史語用論が明らかにしつつあることである。たとえば、中世のある時期において、聞き手の領域を積極的に認めるような社会的要請が生じたことにより、授受表現や指示詞などに変化が起こったことが知られている。翻って、方言形成の基盤となる地域もまた、地域の社会や文化の有り様は多様であり、地域社会・文化のあり方の差が、地域言語の多様性を生み出すものとして捉えられよう。このような、社会のあり方のうち、言語の、特に文法形式に影響を及ぼすようなものを仮に「語用論的な要請」と定義しておく。本研究では「語用論的な要請」がどのような文法形式に影響を与えるのかを探ることを目的とする。そこで、複数の方言を比較対照するという方法論を採って、当該の「語用論的な要請」のあり方を探る。

2. 研究の目的

本研究の当初の目的としては、以下の3つを掲げていた。

(1)「語用論的な要請」が生み出す言語バリエーションと方言文法の差を解明する。すなわち、言語バリエーションや方言文法の差を生み出す背景に関わる「語用論的な要請」を解明することで、方言形成が地理的要因や言語の内的変化から生じるだけでなく、社会のあり方が関わっていることを積極的に示すことである。

(2)ダイクシス表現間の相関関係および文法形式の方言差を明らかにする。研究グループのメンバーのこれまでの研究から次のことが指摘されていた。①沖縄県うるま市津堅方言において、指示詞の使用のあり方と移動動詞の使用のあり方において、自分と他者との境界の曖昧性があると考えられる。②奄美群島北部の喜界島方言の一部の地域において、人称表現が指示表現に持ち込まれる中で人称代名詞における体系的区別が指示表現に影響を与えていると考えられる。③京都方言において、指示詞の使用を見ると、聞き手の領域をより広くとる(つまり、ソ系指示詞を用いる)傾向が強いことは、ハル敬語の多用することに通じることが指摘できる。以上のように、特に指示詞のあり方と、移動動詞、人称代名詞、敬語等の各文法との相関関係が指摘できる。日本諸方言において①～③のようにダイクシス表現間で関連することが指摘されるが、その関連する理由や仕組みを「語用論的な要請」から解明することを目的の1つに据えた。

(3)「感情」を発露とする文法研究の展開を目指す。

文法研究は形態論および統語論など文における機能を中心になされてきたが、昨今、定延(2016、2014)や分担者の堤(2018)において、「感情」が文法形式の選択に影響を与えるということが指摘されるようになってきた。「語用論的な要請」は社会のあり方が文法形式に反映されたものとするが、その社会を形成する人間の「感情」にも注目して、研究を進める。

上記は、本研究の当初の目的として設定したものである。本研究が研究対象とするダイクシス表現については、場面や状況に依存するものであり、対面調査や臨地調査をおこなう必要がある。しかし、2020年に発生した covid19 の影響により、十分な臨地調査が行えず、全体的に研究の見直しをおこなった。研究全体としては、これまでに収集したデータの整理をおこないながら、琉球諸語における指示詞の研究課題の整理を中心におこない、北琉球方言における指示詞の機能を明らかにすることを主な目的として研究を進めた。したがって、「4. 研究成果」では、北琉球方言における指示詞の機能として明らかになったことを示す。

3. 研究の方法

本研究の方法は、主に方言調査による言語データの収集と分析である。具体的には以下に示すとおりである。

(1)ダイクシス表現に関わる調査票の作成、調査を行い、ダイクシス表現を総合的、体系的に記述する。特に方言差がある程度明確に見られる琉球方言と関西方言を中心とした対照研究として、両方言におけるダイクシスの文法形式の差異を明らかにする。

(2)ダイクシス表現間の相関関係を整理し、言語バリエーションや方言文法の差を生み出す背景に関わる「語用論的な要請」を解明する。

上記は、本研究の当初の研究方法である。しかし、2020年に発生した covid19 の影響によって、研究の目的を大幅に変更し、北琉球方言の指示詞の機能についての記述を主な目的とした。北琉球方言の指示詞の研究課題を見いだすために、これまでに収集した談話データを見直したり、そのほかの資料の整理をおこなったりした。これらの作業をとおして、指示詞に関する調査票を作成し、2022年度以降、調査をおこない、分析する方法をとった。

4. 研究成果

本研究課題の期間中の2020年に発生した covid19 の影響により、特に2020～2022年度にかけて移動制限等もあり、十分な臨地調査が行えず、全体的に研究の見直しをおこなった。琉球諸

語における指示詞の研究課題の整理を中心におこない、北琉球方言における指示詞の機能を明らかにすることを主な目的として研究を進めた。したがって、ここでは、北琉球方言における指示詞の機能として明らかになったことを示す。

本研究課題の成果として、主に沖縄県うるま市津堅島、奄美大島佐仁集落の指示詞の特徴や機能について述べる。また、これらの研究を通して見えてきた琉球諸方言の指示詞の研究課題を提示する。

(1) 沖縄県うるま市津堅方言の指示詞について

琉球諸方言において、指示詞は共通語と同様の3系列の体系を持つ方言と共通語とは異なる2系列の体系を持つ方言とが混在している。津堅方言の指示詞は、*u-*と*a-*の2系列の体系である。まず、津堅方言の指示詞*u-*と*a-*について、視点对立型、視点融合型における使用について示す。

① 視点对立型における *u-*と*a-*の使用

視点对立型における *u-*と*a-*の使用を示すと以下のとおりである。

1. 話し手の近くの物や人

uri= \varnothing *mi-i*=*be*

これ=対格 見る-命令=文末助詞 (これを見なさい。)

2. 聞き手の近くの物や人

uri= \varnothing *misir-i*=*be*

それ=対格 見せる-命令=文末助詞 (それを見せなさい。)

3. 話し手からも聞き手からも遠い物や人

ari= \varnothing *mi-i*=*be*

あれ=対格 見る-命令=文末助詞 (あれを見なさい。)

uri= \varnothing *mi-i*=*be*

あれ=対格 見る-命令=文末助詞 (あれを見なさい。)

例文を見ると、*uri* は、視点对立型において「話し手近く (これ)」「聞き手近く (それ)」「話し手からも聞き手からも遠い (あれ)」のすべてにおいて使用可能であることが分かる。ただし、「話し手からも聞き手からも遠い」物や人を指す場合、基本的には *ari* が用いられる。以上のことから視点对立型における *u-*と*a-*の機能について、次のようにまとめることができる。話し手近く、聞き手近くのもの指すときは、いずれも *uri* を使用する。話し手からも聞き手からも遠いものを指すときは、*ari* を使用することが一般的であるが、*uri* も使用できることがある。

② 視点融合型における *u-*と*a-*の使用

視点融合型における *u-*と*a-*の使用を示すと以下のとおりである。

4. 話し手・聞き手の近くの物や人

Satomi *uri*= \varnothing *tur-i*=*be*

サトミ これ=対格 取る-命令=文末助詞 (サトミ、これを取りなさい。)

5. 話し手・聞き手から遠い物や人

are *waa*=*ga* *tu-ti* *su-u-wa*

あれ.主題 私=主格 取る-継起(中止) 来る-非過去=直説法(終止) (あれは、私が取ってくるよ。)

6. 話し手・聞き手から遠い物や人

ure *waa*=*ga* *suku-ta-ru* *saa* *ja-ha*

あれ.主題 私=主格 作る-過去-連体 お茶 コピュラ-直説法(終止) (あれは私が作ったお茶だよ。)

例文6では *ure* と *u-*形が使われているが、*are* と *a-*形の使用も可能である。視点融合型における *u-*と*a-*の機能について、次のようにまとめることができる。話し手・聞き手近くのもの指すときは、*uri* を使用する。話し手・聞き手から遠くのもの指すときは *ari* を使用することが一般的であるが、*uri* も使用できることがある。ただし、*uri* を使用していても、いったん距離

的に「遠い」ということが意識されると *ari* の使用に変わることがある。*uri* は、距離に関係なく、「指し示す」機能を持ち、*ari* は「距離的に遠い」ことが意識されると現れると考えられる。

さらに、例文6を変形して、例文7のように「あそこにあるお茶は私が作ったものだよ。」と「あれ」を「あそこ」と場所指示代名詞に変えると、*u*-形の *uma* は使用しにくい。場所指示代名詞は空間的に認知した距離感を表出するので、近／遠の対立が明確であると言えよう。

7.話し手・聞き手から遠い物や人

ama=Nka a-ru saa=ja waa=ga suku-ta-ru muN ja-ha
 それ.主題 ある=連体 お茶=主題 私=主格 作る-過去-連体 もの コピュラ-直説法(終止)

(あそこにあるお茶は私が作ったものだよ。) ※*uma=Nka* とはしにくい。

平田(2020)には、Enfield (2003) によるラオ語の指示詞の意味記述について次のような記載がある。「nan4 が‘DEM’に加え空間情報をコード化するのに対し、‘DEM’のみを意味情報として持つ nni4 は、空間情報などの、聞き手が対象を特定するためのさらなる情報を伝えることはしないため、空間情報を持つ nan4 よりも、より「意味的に欠乏」(Levinson2004:101) していることになる。[平田 2020 : 104]」なお、‘DEM’とは、指さしジェスチャーから派生した、発話場面を「指し示す (indicating)」機能の表示である ([平田 2020 : 28])。

以上の Enfield (2003) の記述を援用して、津堅方言の指示詞を意味記述的に見ると、*uri* は「指し示す」という機能のみを持ち、*ari* は「指し示す」に「空間情報」が付加される。すなわち、Enfield (2003) によって提案されたラオ語の指示決定詞の在り方と類似すると言える。

<i>uri</i>	DEM
<i>ari</i>	DEM + NOT HERE

(2)奄美大島佐仁集落の指示詞について

佐仁方言の指示詞の特徴として、①指示対象、品詞による形式の不均衡、②基本的にはモノ(人間以外)を指すモノ指示代名詞-N形存在、③ヒト指示の *ari* の指示範囲について取りあげる。

①指示対象、品詞による形式の不均衡

まず、佐仁方言の指示詞の体系を示すと、以下の表1のとおりである。

表1 佐仁方言の指示詞の体系

	近称		遠称
基本的な指示代名詞	<i>huri</i>	<i>uri</i>	<i>ari</i>
モノ指示代名詞	<i>huN</i>	<i>uN</i>	<i>aN</i>
場所指示代名詞	<i>m'a(a)</i>		<i>aa</i>
基本的な指示連体詞	<i>huN</i>	<i>uN</i>	<i>aN</i>
様態指示副詞	<i>asshi</i>		
様態指示連体詞	<i>ashuN</i>		

佐仁方言の指示詞の体系の特徴として、2つことが指摘できる。一つは(形式上の)系列の数が、指示対象・品詞によって均一でないということである。共通語では、指示対象や品詞による形式の不均衡はなく、「これ・それ・あれ」「ここ・そこ・あそこ」「この・その・あの」のように基本的な指示代名詞、モノ指示代名詞、指示連体詞は三系列、場所指示代名詞は二系列、様態3形式に対応する形態がある。しかし、佐仁方言においては、指示副詞・様態指示連体詞は一列となっており、指示対象、品詞によってばらつきがある。二つは、1形式上三系列になっている場合でも、意味機能上は近称・遠称の二系列になっていることである。基本的な指示代名詞、モノ指示代名詞、指示連体詞は三系列であるが、*hu*-系・*u*-系は近称(話し手/聞き手から近い対象)、*a*-系は遠称(話し手からも聞き手からも遠い対象)になっている。

②基本的にはモノ(人間以外)を指すモノ指示代名詞-N形存在

huri/uri/ari などの *-ri* 形の基本的な指示代名詞に加え、指示連体詞+*muN*(もの)に由来すると考えられる、*-N*形のモノ指示代名詞 *huN/uN/aN* が存在する。*-N*形は、指示連体詞+名詞「もの」から成立したと考えられる。具体的に示せば、以下のとおりである。

指示連体詞 + 名詞「もの」> *-N*形モノ指示代名詞
 *ano + *mono > aN

成立過程に名詞「もの」を含んでいることにより、基本的にはモノ(人間以外)を指す。すな

わち、*-ri* 形はヒトもモノも指示できるが、*-N* 形は基本的にはモノを指示する。ヒト指示とモノ指示との例を対照して示せば、次のとおりである。

8. 指示代名詞 (ヒト指示) + 主題助詞

ari=ya *taru=kēi?*
あれ=主題 誰=疑念 ((遠くの人を指して) あれは誰かな。)

9. 指示代名詞 (モノ指示) + 主題助詞

{ *ari=ya / aN=mya* } *nuu=kēi?*
あれ=主題/あれ=主題 何=疑念 ((遠くの物を指して) あれは何かな。)

なお、*-N* 形が人を指す場合には、指示対象を卑下した表現となる。

10. モノ指示代名詞による卑罵表現

{ *uN / huN* } = *mya* *taru=cchi* *shicchun=nya?*
こいつ~そいつ=主題 誰=引用 知る.継続.非過去=肯否疑問
({こいつ~そいつ} が誰か知っているか?)

③ ヒト指示の *ari* の指示範囲

ari は、基本的には話し手・聞き手から遠い対象を指す遠称で用いられる指示詞であるが、(成人した) 人を指示する場合には、話し手・聞き手から近い人を指示することができる。その一方で、近称の *huri/ uri* は、話し手・聞き手から近い人を指示することもできるが、*ari* を用いた場合よりも (指示対象となる人を) ぞんざいに扱った表現となる。

11. 話し手/聞き手から遠い対象: ヒト指示

ari=ya *taru=ga* { *=yi?* / *ar-ishor-u=yi?* }
あれ=主題 誰=焦点 {=肯否疑問/コピュラ-尊敬-強調=肯否疑問
あれは {誰だっけ? / どなたでしたっけ? }

12. 話し手/聞き手から近い対象: ヒト指示

uN *shigutu=ya* { *ari* / **uri* / **huri* } = *ni* *sirasu=ya*.
その 仕事=主題 {*ari* / *uri* / *huri* } = 与格 する.使役.意志=文末助詞
(話し手/聞き手の隣の人を指して) その仕事は彼にやらせよう。(※はぞんざいな表現)

(3) 琉球諸方言の指示詞の研究課題

本研究課題は、2020年に発生した *covid19* の影響により、研究対象を指示詞に絞って整理、記述する方針に転換したが、これらの研究活動を通して、特に琉球諸語の指示詞研究の課題が明らかになってきた。以下、琉球諸語の指示詞の研究課題を挙げる。

- ① 琉球諸語の指示詞については、個々の地域言語の断片的な研究に留まり、琉球諸語の指示詞の全体像はいまだもって明らかにされていない。
- ② いわゆる共通語で言うところの近称・遠称の2系列と近称・中称・遠称の3系列の2つの体系があることが知られているが、その分布や機能などの実態は全体的には不明である。佐仁方言の体系に見られるように、体系内の不均衡も見られ、2系列、3系列といった捉え方自体の見直しも必要である。
- ③ 琉球諸語の場合、2系列と3系列のバリエーションがあることや共通語とは異なる用法を持つことから、琉球諸語の指示詞を捉えるための理論的な枠組みの構築が必要である。

参考引用文献

平田未季 (2020) 『共同注意場面による日本語指示詞の研究』 ひつじ書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 堤良一	4. 巻 24
2. 論文標題 平田未季（著）『共同注意場面による日本語指示詞の研究』ひつじ書房（言語編）第168巻	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 179-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堤良一	4. 巻 22（1）
2. 論文標題 日本語文法学界の展望（2018～2020）現代語	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 91-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堤良一・閻琳	4. 巻
2. 論文標題 「聞き手」としての非母語話者の容認性判断	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』	6. 最初と最後の頁 155-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 白田理人	4. 巻 9
2. 論文標題 北琉球奄美喜界島北部方言の確認要求表現 視覚動詞命令形由来の形式を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西日本国語国文学	6. 最初と最後の頁 44-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松丸真大	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 日本語文法学界の展望(2018~2020) 方言	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 187-194
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤良一・岡崎友子	4. 巻 第161号
2. 論文標題 心内の情報を指示するソ系(列)指示詞の用法について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 91-117
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 又吉里美	4. 巻
2. 論文標題 沖縄県うるま市津堅	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の消滅危機言語・方言の文法記述	6. 最初と最後の頁 437-472
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 又吉里美	4. 巻 45号
2. 論文標題 津堅島の民話「ハトと神のウムヒ」の方言翻訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松丸真大・于一楽	4. 巻 第4号
2. 論文標題 "I love you"と「私はあなたを愛している」 英語と国語から「ことば」のしくみを考えるコラボ授業	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 滋賀大学教育実践研究論集	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shirata, Rihito	4. 巻 27
2. 論文標題 Personal Pronouns as Markers of Spatial Deictic Anchors: The Case of the Demonstrative System in Kikai Ryukyuan. Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 堤良一	4. 巻 34号
2. 論文標題 初級レベルのコミュニケーション教育 - コミュニケーションを重視すると初級の教育はどう変わるか? -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上智大学言語学会会報	6. 最初と最後の頁 48-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白田理人	4. 巻 42
2. 論文標題 奄美大島今里方言の埋め込み疑問文について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 153-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 又吉里美
2. 発表標題 津堅方言における指示詞の体系とその使用について
3. 学会等名 2023年度(第46回)沖縄言語研究センター 総会・公開研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白田理人, 重野裕美
2. 発表標題 北琉球奄美大島笠利町佐仁方言の指示詞について
3. 学会等名 沖縄言語研究センター例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 又吉里美, 白田理人, 重野裕美
2. 発表標題 琉球諸語における指示詞研究の課題
3. 学会等名 第56回九州方言研究会 / 九州方言研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高谷由貴・堤良一
2. 発表標題 引用形式と「まとめ上げ」についてー「行ーこうっと」は言えて「行ーこうって」と言えないのはなぜか？ー
3. 学会等名 日本語音声コミュニケーション学会2022年度春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堤良一
2. 発表標題 「指示詞+固有名詞+ガ」の「予測裏切りの意味」以外の用法について 具体例の観察を通してー
3. 学会等名 日本語文法学会第23回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島方言における人称代名詞を含む指示表現
3. 学会等名 広島大学国語国文学会 2022年度研究集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 喜界島方言の特徴 系統研究に向けて
3. 学会等名 言語系統樹ワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島方言の人称代名詞と指示代名詞
3. 学会等名 九州大学言語学研究会第119回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堤良一
2. 発表標題 基準指示用法について
3. 学会等名 台湾淡江大学日文系における講演（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 重野裕美・白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美大島方言の助詞baの二つの機能 対格標示と取り立てー
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 又吉里美
2. 発表標題 津堅方言の指示詞について
3. 学会等名 沖縄言語研究センター1月定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 又吉里美
2. 発表標題 沖縄県うるま市津堅方言の格
3. 学会等名 日本の消滅危機言語・方言の文法記述とドキュメンテーション「2019年度 第1回研究発表会 「格・情報構造（琉球諸語）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堤良一
2. 発表標題 初級レベルのコミュニケーション教育 コミュニケーションを重視すると初級の教育はどう変わるか？
3. 学会等名 第34回上智大学言語学会「コミュニケーション能力を育てる日本語教育」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堤良一
2. 発表標題 個人差とキャラクタのプロフィシェンシー
3. 学会等名 第1回日本語プロフィシェンシー研究学会国際シンポジウム（第12回OPI国際シンポジウム）、（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堤良一・岡崎友子
2. 発表標題 心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について
3. 学会等名 2019年第一回土曜ことばの会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 疑問詞疑問文とその周辺 喜界島方言・奄美大島方言のデータから
3. 学会等名 2019年度（第42回）沖縄言語研究センター 総会・研究発表会・シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島志戸桶方言の条件文について
3. 学会等名 沖縄言語研究センター2019年度10月定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島小野津方言の疑問文末標識と言語行為 話し手の行為遂行に関する疑問文を中心に
3. 学会等名 日本言語学会第159回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rihito Shirata
2. 発表標題 Personal pronouns as markers of spatial deictic anchors: The case of the demonstrative system in Kikai Ryukyuan
3. 学会等名 The 27th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 松丸真大・白岩広行・原田走一郎・平塚雄亮	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ワークブック 方言で考える日本語学	5. 総ページ数 146
3. 書名 くろしお出版	

1. 著者名 依山雄司(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 276
3. 書名 『自由に話せる会話シラバス』	

1. 著者名 閻琳・堤良一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 レポート・卒論に役立つ 日本語研究のための統計学入門	

1. 著者名 岸江信介、中井精一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 304
3. 書名 地図で読み解く関西のことば	

1. 著者名 堤良一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 凡人社	5. 総ページ数 197
3. 書名 いい加減な日本語	

1. 著者名 木部暢子・竹内史郎・下地理則編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 309
3. 書名 日本語の格表現（竹内史郎・松丸真大「第4章 本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について 京都市方言と宮城県登米町方言の分析」pp.65-108）	

1. 著者名 竹内史郎・下地理則編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 『日本語の格標示と分裂自動詞性』（竹内史郎・松丸真大「京都市方言における情報構造と文形態 格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性」pp.67-102）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堤 良一 (Tsutsumi Ryoichi) (80325068)	岡山大学・社会文化科学学域・教授 (15301)	
研究分担者	松丸 真大 (Matsumaru Michio) (30379218)	滋賀大学・教育学部・教授 (14201)	
研究分担者	白田 理人 (Shirata Rihito) (60773306)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------